

聖書：ローマ 13：11～14

説教題：近づいている救い

日時：2016年7月3日（朝拝）

今日の箇所は 12 章と 13 章のメッセージの締め括りとなる部分です。パウロは 1～11 章で福音の教理について語った後、12 章から実践について書いています。そして前回までの部分で色々なことが語られました。そして今日の 13 章最後で読者たちを今一度、実践へ駆り立てるための励ましを語っています。どういう観点からそれはなされているのでしょうか。11 節でパウロは「あなたがたは、今はどのような時かを知っているのですから」と言います。すなわち「時」についての正しい認識から、ふさわしい歩みが導かれるように！と彼は勧めています。

「時」について知っておいて良いことは、ギリシャ語には時を現わす有名な言葉としてクロノスとカイロスがあることです。「クロノス」は時計の針が 1 秒 1 秒を刻むことに表される物理的な時のことです。過去から未来へ一定速度で流れる機械的な時、カレンダー的な時のことです。それに対して別の言葉として「カイロス」という言葉もあります。こちらはある決定的な時を指す言葉です。特に神がご計画の中で意味を与えている時、神の定めの時を表す際に使われています。そして 11 節で使われているのは、この「カイロス」という言葉です。ですからここで「あなたがたは、今はどのような時かを知っている」というのは、今日が 2016 年 7 月 3 日であることを知っているという意味ではありません。多くの人はこのカレンダー的な観点から、自分の人生を考えます。しかしクリスチャンはそれだけではない。このカイロスという視点も持っている。そして実にこのような意味での「時」を知っていることが、私たちを正しい実践へと駆り立てるといふことについてパウロは語っているのです。

ではこの視点で今はどのような時なのでしょう。それは 11 節で言えば「救いが私たちにもっと近づいている時」と言えます。ここに時はいつまでもダラダラと進むものではないことが示されています。時は今までと同じ調子でズーッと 1 秒 1 秒刻まれて行くのではない。この世界の歴史あるいは時間は、ある目的に向かって導かれている。ここで近づいていると言われている「救い」とは、神が定めた最終的な救いのことです。私たちはイエス・キリストを信じてある意味で「救われた」と言って良いのですが、まだ最後の状態には達していません。その完成は世界の歴史の終わりに用意されています。

そのことについて、この手紙の中でも色々言われて来ました。たとえば5章2節に「私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいますが」とありました。この「神の栄光」とは、神が私たちに与えてくださる最後の栄光の状態のことだと申し上げました。同じく8章18節に「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」とありました。また8章29節では「御子と同じ姿に変えられること」と述べられており、次の30節にも最後の状態が「栄光」と言い表されています。私たちは今すでに救いの恵みを受けていますが、その完成はこれから来ます。罪との戦いが勝利の内に終わり、もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない、正義の住む新しい天と新しい地に住むのです。そして神が私たちとともに住み、私たちはその民となるという神との全き交わりの祝福の状態に達するのです。

この救いが今はもっと近づいていると言われていています。聖書の中には主の再臨の日は近いという表現がしばしば見られます（たとえばペリピ4章5節）。しかしある人は、新約聖書でそう言われていても、それから2000年以上たった今日もまだ主の再臨は起きていない。これではどうして近いと言えるのだろうか。パウロの予測は外れたということなのではないかなどと問います。しかしそれはクロノス的な見方で「時」を見ているからです。聖書は今は「終わりの日」「終わりの時代」と語っています。それは聖霊が下ったペンテコステの日から始まりました。ペテロは「終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ」というヨエル書の預言を引用して、ここに終わりの日が始まったと語りました。これはどういうことでしょうか。神は旧約時代から救い主を遣わすと約束して来られました。そしてついにその救い主が地上に現れ、みわざをなし、十字架にかかり、復活して、天に上げられました。そしてその天から聖霊を注がれました。とすると神のご計画における次のプログラムは何でしょうか。それはもう主の再臨だけなのです。そしてそれが起これば後は最後の審判、新天新地へと一気に進みます。そういう意味で聖霊降臨以降の時代はもう終わりの時代なのです。世界の歴史に関する神のご計画は最終段階に達しているのです。あとはいつ最後のイベントが起きてもおかしくないという意味で救いは近いのです。パウロは「私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいている」と言っていますが、確かに一日また一日と過ぎるごとに確実にその日は近づいて来ています。私たちは今がこのような「時」であることを知っているのでしょうか。

また同じ今の時のことが12節では「夜はふけて、昼が近づきました」と表現されて

います。ここでは今の時代が「夜」と表現されています。これは罪による暗さ、あるいは悪が支配する暗さを表しています。しかしその夜もふけて昼が近づいたと言われています。これは夜がふけて、夜明けが近づいたということです。日が昇り始めて、日の出の光が闇を追い払う直前の状態にあるということです。今の罪の世がさばかれ、神の救いの世界、栄光の世界が力をもって輝き現れようとしている。今がそういう「時」であることを私たちは知っているでしょうか。ただカレンダーを見て今日は何月何日であるとか、今年は何月何日あるとか、来年は何をしようかというクロノス的な見方でだけ生活してはならないのです。私たちはカイロスの視点で今の「時」を正しく認識して、それにふさわしく歩む者でなくてはならないのです。

では私たちはこのような「時」を知っている者として、どのように歩むべきでしょうか。パウロはそのことも今日の箇所ですべて述べています。まずここから教えられることは、今までの生き方は新しく訪れようとしている世界では通用しないということです。夜の世界では物事は良く見えません。やみは物事を隠します。ですから悪い事件は大体夜に起こります。今の世はそのように少々悪を行なってもすぐにはさばかれませんが、分からないままのことも多い。悪を行なった方がうまく行くこともあります。そこで私たちも霊的に眠り込んだ状態に陥りやすい。しかし夜が明けて、主の日が来るとどうなるでしょうか。その日には光はそれまで見えていなかったものをさらけ出します。主の日の光はすべてを白日の光のもとにさらけ出すのです。この手紙の2章16節でも、やがての日のことが「人々の隠れたことをさばかれる日」と言い表されていました。あるいはIコリント4章5節：「ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。」 IIコリント5章10節：「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。」 ある意味で恐ろしい言葉ですが、このことを知るなら、今まで闇の世界で大丈夫だったからと言って同じ生活を続けるべきでないことが分かります。むしろ12節にあるように「やみのわざを打ち捨てなければ」なりません。

13節に「遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく」とあります。最初の二つはお酒に関する事、次の二つは性に関する事、最後の二つはそれらから生じる争いに関する事です。これはパウロがこの手紙を書いたコリントの町では一般的で

あった不道徳です。それらを直ちに打ち捨てる。そしてもちろんこれだけではありません。私たちにとって打ち捨てるべき闇のわざとは何でしょうか。それは光に照らされては困ってしまい、恥じ入るような生活のことです。やみの中でだけ成り立つ生活です。それらとはきっぱりお別れしなくてはならない。直ちに打ち捨てなくてはならない。そのような生活はもう続かないのです。これが今がどのような時かを知っている人のあり方です。

そしてより積極的には「昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか」と言われています。これは光に照らされても何ら恥じるることのない生き方のことでしょう。やがての天国での生活へとつながって行くあり方のことでしょう。12節では「光の武具を着けようではありませんか」と言われています。「武具」という言葉から明らかのように、これは戦いのイメージです。私たちの地上での生活は戦いであるということです。そのためには光の武具、神の武具を身に着けなければならない。神の武具についてはエペソ書6章10～20節に記されています。腰に締める真理の帯、正義の胸当て、平和の福音というはきもの、また信仰の大盾、救いのかぶと、御霊の剣である神のみことば、祈り、など。これらを積極的に手に取り、自らの身に着けてこそ、私たちは戦いの生活ができるのです。

そしてパウロは最後の14節で、このような歩みのカギになることとして「主イエス・キリストを着なさい」と言っています。ガラテヤ書3章27節では「バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです」と言われています。なのに今日の箇所では「キリストを着なさい」と言われています。これは一度信仰告白をしてキリストと結ばればそれで良いのではなく、日々キリストと結ばれ、キリストに信頼して歩むようにということでしょう。ここで私たちが着るようになると言われている主イエス・キリストは、今や死からよみがえって栄光の内におられる主イエス・キリストです。私たちを救うための全権を持っている主イエス・キリストです。私たちはどこにいても、また何をするにしても、この方を身に着けていると言えるような関係に、その方に包まれているような関係に生きることができる。そのためにはただそういうイメージを持てば良いのではなく、主の御言葉に積極的に聞くことが大事でしょう。またキリストに祈ることもそうです。そしてキリストが示す道に従う生活をする。そうする中で、すでに私たちはキリストにあって根本的に罪の力から解放放たれているとローマ書6章で言われましたが、その卓越した力に日々新しく生かされることができ

るのです。私の力によってではなく、キリストがさらに与えて下さる恵みの力によって、新しい歩みへ進んで行く。そしてこの方との親しい交わりの中で、私たちは益々この方に似る者とさせられて行きます。このキリストに信頼してともに歩むことこそ私たちの取り組むべきことであって、肉の欲のために心を用いている場合ではないのです。

ご存知の通り、今日の箇所はアウグスティヌスが回心へと導かれた箇所です。彼は当時の知識人たちが一般にそうであったように、放縦と不道德の生活を送っていて、そのことで自らを責め、心の葛藤に苦しんでいました。そんなある日の午後、庭園で泣いていたところ、隣の家から子どものような声が「取りて読め、取りて読め」と繰り返し歌う声に導かれ、手に取って読んだのがこの13章13～14節でした。彼は『告白』の中でこう言っています。「この節を読み終わると、たちまち平安の光ともいうべきものが私の心の中に満ちあふれて、疑惑の闇はすっかり消えうせた。」そして新しい歩みへと導かれて行きました。私たち一人一人にとっても、この御言葉は新しい歩みへと駆り立ててくれる御言葉なのではないでしょうか。

私たちは今がどのような「時」かを知っています。救いはよいよ近づいています。朝が来たら私たちは寝間着は脱いで昼の格好をします。この世では休みの日には昼になってもパジャマのままで、そのまま過ごすのが楽しいということがあるかもしれません。しかし救いの日が来たのに、なお夜の生活を続けていることは取り返しのつかない重大なことです。「夜はふけて、昼が近づいた」とパウロは言っています。夜明けはもうそこまで来ています。私たちは今のこのような「時」を認識して、私たちの歩みがさらに正しく駆り立てられるものでありたいと思います。近づいている救いを見つめて、益々キリストに信頼し、その恵みの力に包んでいただき、間もなく訪れる救いの世界・昼の世界・栄光の世界へ喜びをもって入って行く歩みへ進みたいと思います。